

神戸女子大学古典芸能研究センター特別展示

写真展 「季節の神々」

—西谷先生が訪ねた兵庫の民俗—

会期: 令和7年3月1日(土)~12日(水) 休園日: 3月6日(木)

時間: 午前10時~午後4時

会場: 神戸市立須磨離宮公園内 和室

兵庫県には庶民の生活に根ざした数多くの民俗が伝承されてきました。高校教師だった西谷勝也氏(1906~1969)は、勤務のかたわら兵庫県の各地の伝承行事や民俗資料を訪ね歩き、多くの論考を執筆しました。その集大成が柳田国男賞を受賞した『季節の神々』(1968)です。

今回は、この本の論拠に挙げられた写真を中心に、兵庫県各地の四季おりおりの行事や懐かしい風物の写真を展示します。この展示が、私たちの生活のリズムの根っこにあるものを見直し、地域に根ざした未来を展望する機会となることを願っております。どうぞゆっくりとご覧ください。

開催にあたって

今年は戦後80年、昭和の年号で換算すると昭和100年に当たります。昭和の高度成長期までは身の回りにありふれて存在していた風物が、現代からは断絶したものとして感じられるようになってきました。高度成長期以降、私たちは物質的な豊かさの追求に没頭し、昭和終盤のバブル期には心身が浮かれた高揚感に包まれることもありました。しかし、その一方で、身の回りのものを慈しむ心の落ち着きは失われていったのではないのでしょうか。むしろ、そのような停滞を忌避するかのよう

に時代は進んでいったように思われます。時代は令和となって、「身のたけを超えた浮かれ騒ぎが果たして本当の幸せなのか」と問い返す段階に至り、「心の落ち着き」が真に求められる状況となっているように感じられます。そのような際に、高度成長期以前の「祈りの心」を中心とした生活の文化は、単なる懐かしさのレベルを超えて、私たちの未来への指針を与えてくれるのではないのでしょうか。

農業を中心とした生活において「祈り」の対象になったのは、「季節の神々」です。今回展示する西谷勝也が撮影した写真群は、当時の人々が四季折々の生活のなかで自然と共生しながら示してきた、季節ごとの神々への祈りの様相を、飾り気なく私たちに伝えています。今回の写真展が、身の回りの神々にさりげない感謝の心を持って生きてきた人々と対話して、立ち止まって考える機会となることを願っています。

令和7年3月

展示監修

神戸女子大学文学部教授

神戸女子大学古典芸能研究センター兼任研究員

川森 博司

〔展示写真〕

A. お正月

お正月には歳神としがみが訪れると農村社会の人々は考え、歳神を迎える準備を念入りにおこないました。門松を立てることは一般的ですが、淡路におけるヤマドッサン（山年様）のように人格化した姿で訪れる歳神の信仰を持っていた地域もありました。折口信夫がマレビトという言葉でまとめた日本の信仰の原形が残されていた貴重な事例です。

また、年頭に村人が集まってその年の豊作を祈るハナフリという行事が兵庫県の各地でおこなわれていました。葉のついたサカキやシキミの枝を束ねたもの（ハナ）を稲に見立てて打ち振るのです。悪鬼・邪霊を追い払うためのマト（弓での射る行事）も各地の神社でおこなわれました。思うようにならない自然環境に厳粛に対処してきた人々の思いをそこに見ることができます。

小正月（1月14～15日）には、子どもたちを担い手とする行事が多くおこなわれました。キツネガリは正月の神を送る行事で、兵庫県の各地に分布していました。鬼の行事の多くも、追い払われる鬼ではなく、初春の訪れを告げ知らせ、祝福をもたらす鬼が活躍しました。子どもたちが鬼の行事に深くかかわったことも兵庫県の特徴といえます。

- | | | | | | |
|------|-------------------------------|-------------|-------------------|-------------------|----|
| A-01 | 歳神 <small>としがみ</small> の石碑 | （淡路島民俗総合調査） | 淡路市・南あわじ市 | 昭和37年（1962）8月 | 撮影 |
| A-02 | 家の門口に門松を立てて歳神を招く | | 淡路市浦奥 | 昭和30年（1955）12月31日 | 撮影 |
| A-03 | 門松を立てて歳神を招く | | 神戸市北区八多町深谷 | 昭和40年（1965）1月2日 | 撮影 |
| A-04 | ヤマドッサンのまつり：蓑笠姿の主人によるツキアゲ | | 淡路市舟木 | 昭和30年（1955）1月9日 | 撮影 |
| A-05 | ヤマドッサン：鉞に蓑と笠を着せたご神体を祀る | | 淡路市舟木 | 昭和30年（1955）1月9日 | 撮影 |
| A-06 | ヤマドッサンを迎える | | 淡路市浦 | 昭和31年（1956）1月15日 | 撮影 |
| A-07 | ヤマドッサンを背に負っていく | | 淡路市浦 | 昭和31年（1956）1月15日 | 撮影 |
| A-08 | 羽織を着て扇子を持ち、屋敷の入口でヤマドッサンを送る | | 淡路市浦 | 昭和31年（1956）1月15日 | 撮影 |
| A-09 | ヤマドッサンを祀る | | 淡路市野島轟木 | 昭和41年（1966）1月9日 | 撮影 |
| A-10 | ヤマドッサンを祀る | | 淡路市野島常磐 | 昭和27年（1952）1月27日 | 撮影 |
| A-11 | ジノカミ（地の神）を土間の柱に祀る | | 淡路市白山 | 昭和30年（1955）12月21日 | 撮影 |
| A-12 | 村の神社の歳神迎え | | 神戸市北区八多町深谷 八王子神社 | 昭和40年（1965）1月2日 | 撮影 |
| A-13 | ハナフリ：ハナ（サカキやシキミの枝）を稲に見立てて打ち振る | | 神戸市西区押部谷町栄 住吉神社 | 昭和40年（1965）1月4日 | 撮影 |
| A-14 | ハナフリ（マト行事）：弓での射て悪鬼邪霊を祓い、豊作を祈る | | 丹波篠山市今野町木津 | 昭和37年（1962）1月2日 | 撮影 |
| A-15 | オトウによるマト行事 | | 神戸市北区八多町 八多神社 | 昭和40年（1965）1月10日 | 撮影 |
| A-16 | キツネガリ | | 兵庫県多可郡多可町中区 | 昭和36年（1961）1月14日 | 撮影 |
| A-17 | オコナイにつどう子供たち | | 神戸市北区山田町福地新池 無動寺 | 昭和36年（1961）2月5日 | 撮影 |
| A-18 | 〔参照〕花祭の鬼 | | 愛知県北設楽郡東栄町奈根中在家 | 昭和37年（1962）1月4日 | 撮影 |
| A-19 | 修正会における鬼の踊り | | 姫路市書写 円教寺（白山権現神社） | 昭和34年（1959）1月18日 | 撮影 |
| A-20 | 節分の鬼：古式追儼式 | | 神戸市長田区長田町 長田神社 | 昭和37年（1962）2月3日 | 撮影 |
| A-21 | 鬼追：鬼役の子供たち | | 加古川市加古川町北在家 鶴林寺 | 昭和38年（1963）1月8日 | 撮影 |
| A-22 | 鬼追：鬼と子供たち | | 兵庫県神崎郡福崎町東田原 神積寺 | 昭和37年（1962）1月15日 | 撮影 |

B. 春

稲の豊作を願うことが農民の生活の中心にありました。日本の稲作においては、苗代から田植えへの段階ごとに田の神へ丁寧な祈りを込めながら、粒粒辛苦して農作業にいそしんだことが特徴といえます。水口祭りにおける真摯なまなざしからは、当時の人々の稲作に賭ける真剣な思いが伝わってきます。そして旧暦6月の田祭りでは、収穫に向けての思いが高まります。

屋台が出る神社の春祭りでは、龍王舞などの個性的な郷土芸能が現在にまで引き続き演じられています。都で人気を博した芸能が村祭りの芸能として定着し、現在まで伝承されているケースが多いのも、兵庫県の特徴といえます。

B-01	田植祭：田の神を祀り、祈る	淡路市岩屋	昭和34年（1959）6月14日撮影
B-02	田の畦にサイキを立てて祀る	淡路市野島常盤	昭和35年（1960）6月12日撮影
B-03	サイキ	淡路市野島常盤	昭和35年（1960）6月12日撮影
B-04	水口祭り	加古川市加古川町中津、大野	昭和34年（1959）5月12日撮影
B-05	田祭り：耕作する田にシバを祀る	兵庫県多可郡多可町中区牧野	昭和35年（1960）7月10日撮影
B-06	田祭りシバ	兵庫県多可郡多可町中区牧野	昭和35年（1960）7月10日撮影
B-07	田祭りシバを供え、豊作を祈る	兵庫県多可郡多可町中区牧野	昭和35年（1960）7月10日撮影
B-08	苗代の水口に田の神を招く	神戸市西区押部谷町木津カ	昭和37年（1962）5月撮影
B-09	北条の節句祭：屋台宮入り	加西市北条町 住吉神社	昭和35年（1960）4月3日撮影
B-10	龍王舞：鼻高の面をつけ、鉾を持つ	加西市北条町北条 住吉神社（節句祭）	昭和39年（1964）4月3日撮影
B-11	龍王舞を見つめる人々	加西市北条町北条 住吉神社（節句祭）	昭和39年（1964）4月3日撮影

C. 夏

日本人の夏の生活は、お盆を大きな区切りとして組み立てられてきました。まずは、6月30日に1年の前半に蓄積した罪・穢れを祓う行事（夏越の祓い）が各地の神社で開催されます。茅の輪をくぐることにより、無病息災を祈るのです。農作業では、かつては害虫が稲作の大敵でした。麦わらの馬に乗ったサネモリ人形を作り、それを害虫の根源に見立てて、村境から村の外へと送り出しました。

お盆には先祖の霊を迎え、盆踊りでもてなし、交歓した後に、送り返します。関西地域では8月23～24日に行われる地蔵盆も盛んで、子どもたちが主役となる一方、百万遍の数珠繰りをおこなって地域の老人たちのつどいの場となるケースも多く見られました。

C-01	<small>なごし</small> 夏越の祓	姫路市大塩町 大塩神社	昭和42年（1967）6月30日撮影
C-02	虫送りに使うサネモリ人形	多可郡多可町中区天田	昭和35年（1960）7月18日撮影
C-03	虫送り：村境に向かう子どもたち	多可郡多可町中区天田	昭和35年（1960）7月18日撮影
C-04	虫送り：害虫を村の外へと送り出す	多可郡多可町中区天田	昭和35年（1960）7月18日撮影
C-05	トウロウギ：先祖の霊を招く	三木市吉川町毘沙門	昭和39年（1964）8月撮影

C-06	お盆を迎える墓		加東市上鴨川	昭和39年（1964）8月11日撮影
C-07	サイレンボウズ：盆の火祭り	たつの市揖西町中垣内	恩徳寺	昭和40年（1965）8月15日撮影
C-08	盆踊り：広場に組まれた櫓		高砂市米田町	昭和34年（1959）8月14日撮影
C-09	新仏の精霊送り		高砂市米田町	昭和42年（1967）8月15日撮影
C-10	愛宕火：愛宕さんに火をささげる		丹波篠山市古市	昭和36（1961）年8月24日撮影
C-11	地藏盆：主役となる子どもたち		高砂市米田町	昭和33年（1958）8月26日撮影

D. 秋

秋は収穫の季節、稲刈りを終わるとカリゴメと呼ばれる形で田の神に感謝の念を捧げました。また、「秋亥の子」は田の神が帰る日とされ、猪の多産にちなんで旧暦10月の初亥の日に供え物を準備して、その年の収穫を祝いました。子どもをおんぶした母の安堵した表情が印象的です。きっと労働の意味を実感する瞬間だったのでしょう。

収穫の歳時記に由来する秋祭りは、各地のきらびやかな屋台とともに、古式をとどめる「^{ひとつもの}一ツ物」（馬に乗る稚児）やトウニン（頭人）による伝統的な運営組織が残されているケースも見られます。その中で子どもや若者が重要な役割を担っていたことにも注目したいところです。

D-01	カリゴメ：稲刈りの終わりに恵方を拝む		三木市吉川町田谷	昭和30年（1955）11月20日撮影
D-02	秋亥の子の供えもの		三木市吉川町湯谷	昭和30年（1955）11月20日撮影
D-03	〔参照〕イノコヅキ		岡山県美作市江見吉田	昭和30年（1955）11月撮影
D-04	秋祭り： ^{みこし} 神輿を先導する子どもたち	高砂市高砂町東宮町	高砂神社	昭和35年（1960）10月撮影
D-05	秋祭り：神輿を取り巻く人々	高砂市高砂町東宮町	高砂神社	昭和35年（1960）10月撮影
D-06	秋祭り：神輿と稚児	高砂市高砂町東宮町	高砂神社	昭和35年（1960）10月撮影
D-07	秋祭り：馬上の「 ^{ひとつもの} 一ツ物」	高砂市高砂町東宮町	高砂神社	昭和35年（1960）10月撮影
D-08	秋祭りのトウニン（頭人）	高砂市高砂町東宮町	高砂神社	昭和35年（1960）10月撮影
D-09	秋祭りの子ども相撲	加東市上鴨川	上鴨川住吉神社	昭和39年（1964）10月5日撮影
D-10	秋祭り：頭人家に建てるオハケ	加古川市尾上町養田	崎宮神社	昭和38年（1963）10月撮影
D-11	秋祭り：露店のにぎわい	加古川市尾上町養田	崎宮神社	昭和38年（1963）10月13日撮影

E. スライドショー「西谷先生が訪ねた兵庫の民俗」

西谷勝也氏が撮影した、日々の暮らしの様子や風景などの写真をお楽しみください。

〔主な参考文献〕

西谷勝也『季節の神々』（慶友社、1968年）

西谷勝也『伝説の兵庫県』（のじぎく文庫 1961年）

小栗栖健治・久下正史編『ふるさとの原像 一兵庫の民俗写真集一』（神戸新聞総合出版センター、2012年）

喜多慶治『兵庫県民俗芸能誌』（錦正社、1977年）

〔人物紹介〕

西谷勝也（1906～1969）氏

明治39（1906）年高砂市生まれ。大谷大学文学部人文学科卒業。昭和21（1946）年から加古川西高校教諭、昭和39（1964）年から白陵高校教諭。かたわら淡路、播磨、但馬をはじめ紀州路などを歩き、民俗学の資料を収集、特に農村の祭を調査した。昭和30（1955）年に日本民俗学会評議員に就任、昭和44（1969）年に『季節の神々』で第8回柳田國男賞受賞。昭和44（1969）年没。

〔著書・論文〕

『季節の神々』（慶友社 1968年）、『伝説の兵庫県』（のじぎく文庫 1961年）、論文に「丹波国波々伯部神社の造山神事と人形操り」（『日本民俗学』22号 1961年）など。

*小栗栖健治・久下正史編『ふるさとの原像―兵庫の民俗写真集―』（神戸新聞総合出版センター、2012年）より

喜多慶治（1901～1992）氏

明治34（1901）年、大阪市生まれ。東京商科大学（現 一橋大学）卒業後、実業界に入る。会社の第一線を退いてから、民俗学の方面に情熱を注ぎ、各地に民俗芸能をつぶさに見てまわり、詳細な記録をとるようになった。平成4（1992）年没。

喜多氏の調査は全国に及ぶが、兵庫県に関する成果は、大著『兵庫県民俗芸能誌』（錦正社、1977年）に集約されている。ここに収録された民俗芸能はすべて喜多氏が実態調査をおこなったもので、きわめて資料価値が高いと学界で評価されている。同書は昭和61年度の第8回神戸史学会賞を受賞した。昭和33（1958）年から平成3（1991）年9月に至るフィールドワークの記録は、現在、古典芸能研究センターのホームページで「喜多文庫民俗芸能資料データベース」として公開している（下記参照）。

神戸女子大学古典芸能研究センターホームページ

<https://www.yg.kobe-wu.ac.jp/geinou/>

〔用語解説〕

ハナフリ…年頭にその年の豊作を祈る行事。ハナ（青々とした葉のついたサカキやシキミの枝）を稲に見立てて振ったり打ちつけたりして、豊かな実りを祈願する。

マト…弓で的を射て悪鬼邪霊を払い、豊作を祈る行事。新年に神社を中心として行われる。

カドマツ…新年を祝って家の門口に立てる松。本来は正月に訪れる年神の依代として設けられたものとされ、正月様と呼ばれることも多い。門松の根元に結われた割木はトシギ・サイギなどと呼ばれ、新年に焚く薪、年木の意を持つ。

ヤマドッサン…淡路島北部で正月に祀られる、山と里とを往き来する作り神、農耕神。鍬に着せた蓑と笠がご神体とされる。この神は醜いので夜遅く来るとも伝えられる。家の裏山から訪れるといい、屋内のジノカミ（地の神）の下やオモテの間に祀られた。またヤマドッサンは爺婆、夫婦の二神といい、供物の膳は2客供える。

ジマツリ…ジマツリ（地祭り）はジノカミ（地の神）を祀る行事で、農耕の予祝儀礼。淡路島では、ジノカミは戸口を入った土間の柱に祀られることが多い。正月9日に行われ、ヤマドッサンもジマツリに含まれる。

キツネガリ（キツネガエリ）…小正月の行事で、但馬・丹波・播磨北部に多い。1月14日夜もしくは15日早朝に、御幣を持った子どもたちが、唱え言を歌いながら家々を廻り、その御幣を村境に立てて歩く。正月の神送りであり、村の一年間の安全を願う村祈祷のお祓いとされる（西谷勝也『季節の神々』参照）。

水口祭り…種粃を苗代に撒いた時に行う稲作儀礼で、4月中旬から5月初旬にかけて行われた。苗代田の水口に土を盛ったり芝を置いたりして、山から採ってきた季節の花や木の枝、正月に村の寺社で授かったゴウツエ（牛王杖）などを立てて祀る。一般には苗代祝いなどと呼ばれる。

ワサウエ…最初の田植えのこと。サビラキ、サンバイオロシなどともいう。（兵庫県ではワサウエが一般的だった。）苗を3把植える儀礼的な田植えを行ったり、神祭りを行う家が多い。

夏越しの祓…6月30日の神事。夏の終りに半年間の穢れを祓い、残り半年を無事に過ごせるように祈る。

虫送り…稲作の大敵であった害虫を、子どもたちが村の外へ送り出す行事。子どもたちは、麦わらの馬に乗ったサネモリ人形を先頭に村の中を練り歩く。サネモリとは平家の武将斉藤実盛。実盛は稲株につまづいて敵に討たれ、それを恨んで稲の害虫になったと伝えられている。

盆と精霊送り…盆は仏教の盂蘭盆の略といわれ、死者供養の仏教色が強いが、村々の民俗には、古い祖霊信仰の面影が残る。先祖の霊は、7月13日、あるいは月遅れの8月13日に迎えられ、15日夕から16日早朝にかけて送られる。迎え火、送り火を焚く場所は家の門口や辻、墓の入り口などさまざまである。精霊送りでは、川や海に盆の供物を流すところが多い。

サイレンボウズ …盆の火祭りのひとつ。サイレンボウズは、長い竹竿の先を割って丸い竹かごを作り、ろうそくを立て紙を貼ったものの名称でもある。

愛宕火…地蔵盆が行われる8月24日は、火伏せの神である愛宕の祭りの日でもあり、この日は各地で愛宕さんに火を捧げる祭りが行われる。

カリゴメ…カリゴメは刈り上げ祝いで、稲刈りの終わりを祝う収穫行事。苗代田の稲3株を残し、刈る前に恵方を拝む。

トウニン…村人たちから成る、社寺の神事や法要を担う組織は一般に「座」と呼ばれるが、兵庫県では「オトウ（御頭）」と呼ぶ例が多い。その中で、その年の神事や法要を中心になって担う人を「トウニン（頭人）」、あるいは「トウヤ（頭屋）」という。

秋亥の子…旧暦10月の主に初亥の日に行われる行事で、猪の多産にちなみ子孫繁栄や豊作を祈る。播磨地区の一部に見られる秋亥の子の「いのこづき」行事は、10月最初か中の亥の日に子どもたちが亥の子石をついてまわる。石を綱でひきあげ、幣を先頭に唱詞をうたいながら家々をまわり、石で庭を打つ。